和訳『セイロン餓鬼説話』

——<上>——

片山一良

I　はしがき
II　和訳
(1)　第十一話　マハーデーヴァ信士説話（Mahādeva-upāsakassa vatthu）
(2)　第十二話　岩山餓鬼説話（Pāsāṇa-petavatthu）
(3)　第十三話　石柱餓鬼説話（Thambha-petavatthu）
(4)　第十四話　耕田餓鬼説話（Kasi-petavatthu）
(5)　第十五話　米餓鬼説話（Taṇḍula-petavatthu）
(6)　第十六話　食障碍餓鬼説話（Bhattantarāyakara-petavatthu）
(7)　第十七話　旗餓鬼説話（Patāka-petavatthu）
(8)　第十八話　軛牛餓鬼説話（Balivadda-petavatthu）

I　はしがき

本和訳は，セイロンにおける仏教説話として知られる『セイロンの説話』第二章に収められた「餓鬼」（ペータ）に関する部分である。パーリ語で書かれた「餓鬼」に関する作品として，最も代表的なものに，我々は「小部経典」中の『餓鬼事経』（Petavatthu）を挙げることが出来るが，これはインドを背景として成立した教訓話である。内容は，その地理・風土を反映してか，極めて強烈であり，その描写から，大陸的な地獄の悪臭がプンプンと漂ってくる感じがしないでもない。これに対して，本稿に扱ったものは，いかにも島国的で，本文にも見られるように，「友よ」と呼びかけたり，呼びかけられたりするような身近かな親しみある餓鬼が登場するのである。同じ仏教での「餓鬼」にしても，勿論，中国，日本においても同様に，こうした文化・地理の差異によって，それぞれ異った様相を呈していることは，まことに興味深いと言えよう。

本和訳の底本は次の通り。

Sīhaḷavatthupakaraṇa (C^{e}), ed. by A. P. Buddhadatta, Śrī Laṅkā, 1959,

pp. 36～56

又，本和訳に当り次の点に注意した。

1．原文に忠実であることを旨とし，訳者による補足は全く施さなかった。（　）内の語は原語であり，又〔　〕内の語句は，底本に施されているものである。

2．底本の頁数を，訳文の左に（　）印を以って示し，又，偈文についてはその番号をゴチックにして示した。

尚，註については，紙数の制限によりこれを省略し，問題となる箇所には＊印を以ってそれを示したことを断っておかねばならない。

Ⅱ　和　　訳

(p. 36)　第十一話　マハーデーヴァ信士説話

1　布施の功徳を説く者は布施物語の勝者であると，布施による正等覚の到達を施捨中の最上であると知って*。

ここに布施の果功徳が物語 (vatthu) と共に賞讃され説かれねばならない。次のように伝えられている。

セイロン島 (Tambapaṇṇidīpa) のニッサダナ (Nissadana) 地方*に，ヴァッタ (Vatta) 村があった。その村にはマハーデーヴァ (Mahādeva) という名前の信士が住んでいた。〔浄信があって法に住する者である。彼は，収獲の〕頃になったので，閑林にある畑の周辺に草房 (tiṇakuṭika) を作り，見張りをするために横臥していた。それより夜半になると，或る餓鬼が飲食物を乞い求めつつ，泣き嘆きながら大道に沿って歩いてくる。その声を聞いて，マハーデーヴァ信士は起き上り，遠くから尋ねた。

2　「夜中に，人もいない森で苦しみ泣いているのは誰だ。飲食物を乞い求めて歩いているのか」

餓鬼は言った。

3　「友よ，私は慳悋の囚になってやって来た餓鬼であります。悪業を作して，餓鬼の世界に行ったものです。

4　私は親族もなく，保護者もないのです。私にはどのような施主もお

りませんが，彼ら守護者を持つ者たちは楽しみのままに食べたり飲んだりして行っております。

5　守護者がおり，欲楽のある者たちは，諸の装身具をもって飾り，象，馬，車などで諸方に出かけるのです」

6　それを聞いてマハーデーヴァは，このように言った。「彼らは，どこで得たのか。そなたは何故，それらが得られないのか」

餓鬼は言った。

(p. 37)　7　「島のボーディピッティ地方にあるローハナの山腹で飲食物を与えて，親族の餓鬼たちのために説戒いたしました。

8　かの親族の餓鬼たちは行って感謝し，一挙に餓鬼の状態を捨て去り，彼らは天の容色を得たのです。

9　彼らを見て，私は泣き嘆き悲しみました。次から次へ，再三再四，乞い求めて行くのです」

信士は言った。

10　「人間の状態を捨てて他世に行った者たちのために説戒して施す者は，親族も親族でない者でもよいのか」

餓鬼は言った。

11　「説戒して施して下さる方は，親族でも親族でない者でもよいのです。餓鬼たちが感謝いたしますならば，それは彼らに役立つのです」

信士は言った。

12　「よろしい。そなたは喜ぶがよい。明日，わしが，布施を与えることにしよう。持戒者たちを家に案内して，飲食物を集めてあげよう」

13　「友よ，あなたに感謝致します。憐愍ある方よ，私にお恵みを。苦界(apāya)から，〔飢と渇をもつ〕私を，引き上げて下さい」

それより，マハーデーヴァ信士は，その夜ふけに僧院へ行って，八人の比丘を招いた。予め家に行き，あらゆる種類の食物を用意させ，再び，かの比丘たちを連れて来て，坐所に坐らせて飲物を施した。「この報いによって，餓鬼に水が生じよ！」と説戒した。粥を与え，硬食を与え，軟食を与え，花の供養(mālāpūjā)をして，「この報いによって，餓鬼に〔粥等が〕生じよ！」と説戒した。餓鬼はその場で感謝して，天の状態(dibbattabhāva)を得た。比丘たちも食べ終ると，感謝して出発したのであった。翌日，信

(p. 38) 士は畑に行って横臥した。夜半になると，かの餓鬼がやって来て，飲み，食べ，飾り，天の姿をして，信士から遠くないところに立って言った。

14　「友よ，起き上って下さい。何故，臥しておられるのです。現証の (sandiṭṭhika) 果をご覧下さい。親切な友人を得まして最上の安楽に達したのであります」

信士は，草房から出て来て，立って，その餓鬼に言った。

15　「友よ，随分遠い所に立っているが，私の近くに来なさい。その荘厳されたところを見よう。そなたは，私に何を恥じているのだ」

餓鬼は言った。

16　「友よ，恥ずかしいのです。私は裸なのです。私には外衣 (sāṭaka) がありません。一切は充満しておりますが，私には一枚の外衣がないのです」

信士は言った。

17　「私は，一枚の外衣をもっている。そなたは受け取るがよい。私が与えよう。この外衣を着て，私の近くに来なさい」

餓鬼は言った。

18　「このように，私には与えられたことがありません，外衣の数百をも*。持戒者がたに与えられたものを，餓鬼たちは受用するのです」と。

彼は，その夜ふけに，再び比丘たちを招請して，食べさせ，一人一人の比丘に一対の外衣を与えて，「この報いによって，餓鬼に外衣が生じよ！」と説戒した。比丘たちは受け取って去って行った。また信士は畑の房に横臥したのであった。夜半になると，餓鬼が天子の姿をして，四方に輝き，あらゆる装身具で飾り，衣服 (dussa) を着てやって来，前方に立って言った。

19　大神変の天子は，親しく前方に立ち，マハーデーヴァを得て，この言葉を述べた。

20　「これは，父母によって作られたものではありません。又，親族によるものでもないのです。私のために，あなたさまがして下さいましたことに，私はお報い致したいと思います」

(p. 39) 彼は，マハーデーヴァを腕にとって，或る無果樹の根元へ案内し，三つの

宝の瓶 (nidhikumbhī) を見せた。一つは金 (suvaṇṇa) で満たされ，一つは銀 (rajata) で満たされ，一つは貨幣 (kahāpaṇa) で満たされていた。「この財宝を取って，受用され，自適され，功徳を施され，又，私に利得 (patti) をお与え下さい」と言って，すべての財物 (dhana) を彼の家に持ち運び，他のものから破壊されないようにして，消え去った。再び言った。

21 「友たちよ，すべてを放出して，最上の布施が与えられるべきです。祖先 (pubbapeta) にも，或は又，友人・天神についても。

22 このように施を与えるものは現証の楽を得るのです。死後，善道に行くのです。その他は何もありません*。

23 それ故に，〔繁栄を望み，自ら〕欲楽を欲し，すぐれた慈悲あり，戒を具し，利益を欲し，他利を求める者は，慳悋を捨てて布施を大いに喜びなさい。

24 マハーデーヴァのように，あなた方も多くを作す人となるべきです。現証の果を受けて，再に善道を享受するのです。

25 こうしたことを聞いて，親族の餓鬼に説戒致しました。法によって布施は，法欲 (dhammakāma) によって，如法に (dhammikaṁ) 与えられるべきであります」

マハーデーヴァ信士説話第十一

第十二話　岩山餓鬼説話

次のように，伝えられている。

セイロン島 (Sīhaḷadīpa) のローハナ (Rohaṇa) 地方では，六十人ばかりの比丘が菩提樹を礼拝する為に，北路を進んでいた。彼らは順次アヌラーダプラ (Anurādhapura) に入り，マハーコンダ (Mahākoṇḍa)* から船に乗って，カーヴェーリ (Kāveri) の港に到着した。そこからなおも進んで，大きな森 (aṭavī) に入ったが，そこで道に迷ってしまった。そこに多くの象が通った足跡を見て，「道だ」と思い，それに沿って三日間進んだところ，或る大
(p. 40) きな岩山のような一コーサもある餓鬼 (peta) を見つけた。「岩だ」と思い込んだ彼らは上って横臥したのである。やがて，大長老は起き上って外での経行をしていたところ，手，足，頭の形を見，「これは鬼だ，これは岩山ではない」と知って，かの比丘たちを呼んだ。「おい，お前たち，下り

なさい。これは鬼だ，岩山ではないぞ」。彼らは，いっせいに下りた。鬼は頭をもち上げた。それを見て長老は尋ねた。

1　「そなたの身体は一コーサもの大きさがあって岩山のようだが，経行する場所が無いではないか。そなたはどのような業を作したのか」

鬼は言った。

2　「尊者さま，私はこの通り鬼でございますが，以前は人間でありまして，迦葉仏 (Kassapasammāsambuddha) さまのときには，僧団の有能な教導者でした。

3　園林，田，土地，財物，穀物，すべて，僧団のものは何であれ，それを愚かにも私は使い果してしまったのでございます。

4　そのような重くて辛い苦しみを，餓鬼の世界 (petaloka) で受けまして，後に私は無間地獄 (avīci) に落ちることになっております」

大長老は言った。「友よ，そなたはどうして僧団のものを使い果したのか」。餓鬼は答えた。

5　「世尊が般涅槃されまして，迦葉さまが世の導師でおられました時，私は，親類の者と一緒に，僧団の田から，穀物をとって食べました。

6　妻子，親族，そして奴僕が。〔すべて一緒に食べまして，私が苦しみを受けているのでございます。〕ただ一人で。

7　私によって作された大きな業が，あまねく焼かれているのです。渇きに悩んでおります。どうか，私の口に水をお注ぎ下さい。

彼ら六十人の比丘たちは，河に入り，鉢に〔水を吹んで，彼の口に注いでやった。初夜から〕ずっと日の出まで充したのであるが，餓鬼の舌さえ全く濡れない。長老は，彼に言った。「おい，一体どんな味がするのか」。餓鬼は言った。

(p. 41)　8　「〔たとえ一千の比丘がたが七夜に亘って私の為に触れて下すっても〕舌先は濡れないでありましょう。ましてや咽喉をどうして通りましょう。

9　僧団のものを使い果しますと，業はこのように激しいのでございます。*「これは楽だ」と，こう考えて私は苦の原因を作ってしまいました。

10　私にのみ〔業を作しました私にのみ〕報いがございます。その業が報われておりますが，庇護が見られません」

『すべての賢者に注がれた水が，もし，私の喉を通り過ぎるならば，私のこの行方 (gati) に，不放出 (amutta) がありますように』と呪文 (sapatha) を唱えて，比丘たちに尋ねた。「ところであなた方はどなたでございますか。具寿さまはどなたのお弟子でいらっしゃいますか」。大長老は言った。

11　「シャカ (sakya) の王家にお生まれになり，姓がゴータマといわれる勝者，彼が我々の世尊であり，師であり，我々はその弟子衆 (sissagaṇā) である」

餓鬼は言った。

12　「もし，ゴータマさまが正覚者として現われた世の導師でありますならば，私は七日後に無間地獄へ行く者となりましょう。

13　迦葉仏さまと，ゴータマ師さまとの間には，この大地 (vasudhā) は，七ガーヴダ (gāvuta) に亘って増大いたしました。

14　年 (vassa) の数は，阿僧祇 (asaṅkhya) もの多くが，過ぎておりまして，私は，餓鬼の世界でその果を多く享受致しております。

15　今や，無間地獄に行きまして，その残余を受けねばなりません。放逸と貪欲とより生じました業は，このように，それは広がったものでございます。

16　このように，僧団の所有物を破壊いたしますと過悪 (dosa) がもたらされるのでありますが，それを保護する人々には，常に徳(guṇa) がもたらされるのでございます。

17　あなた方は，もうお行き下さいまし。今や火焔 (jāla) が私の痩身を焼いております。私をご覧になられて，不放逸に，仏のみ教えの下にご精進なされますよう。

18　刹那の力を獲得して，世間では極めて得難いその刹那を失うことがありませぬよう，仏のみ教えの下にご精進下さい。

19　あらかじめ精進なされて，苦の終りをお作り下さい。苦界の悪道に行かれて私のように悲しみなされませぬように」

(p. 42)　20　実に，僧団のものを破壊することに対するこれらの過悪を見て，法

を喜ぶ比丘は宗教心 (saṁvega) が広大になった。

このようにして，かの比丘たちが続いて下りた時，餓鬼の身体 (sarīra) に大きな火蘊 (aggikkhandha) が生じた。彼らは，又，その光りによって，その夜，一ガーヴタ (gāvuta) 半を進んだのである。行きながら，餓鬼の言葉を憶念して，宗教心 (saṁviggahadaya) は殊勝なものとなったのであった。

岩山餓鬼説話第十二

第十三話　石柱餓鬼説話

次のように，伝えられている。

セイロン島 (Tambapaṇṇidīpa) では，多くの比丘が菩提樹を礼拝するために，出かけた。マハーコンダから船に乗って，カーヴューリの港に到着した。彼らは，順次，村，町，王都 (rājadhānī) を経て大きな森に達した。彼らは，七日間，道に迷い，うろうろしていたが，象の群が通った道を見つけ，そこを行った。彼らは，それに沿って進んだが，岩の中に，はめ込まれた (nikhāta) 或る半身 (addhasarīra) を見て，「人間だ」と思い，その餓鬼のところへ行った。僧団の長老は，道を尋ねて，彼に言った。

1　「七昼夜，皆のものは道に迷っているが，岩の中間に住んでいる者として，比丘たちの為に，道を教えてくれぬか」

餓鬼は言った。

2　「あなたがたは七昼夜，どなたも道に迷ってお進みのようですが，私は，三仏陀の間，ずっと道に迷っているのでございます」

長老は言った。

3　「そなたは，何故，そのように長時に亘って道に迷っているのか。友よ，そなたは，又，ここで何をしているのか。一体，以前にどのような業を作したというのか」

餓鬼は言った。

(p. 43)　4　「私は，カクサンダ仏 (Kakusandha buddha) さまの時には人間でありましたが，悪業を作しまして，この餓鬼の世界に来たのでございます。

5　四ヨージャナの広がりある岩山の頂上にて，彼は業によって沈み，大地の上に定立したのです。

6　このように，大地は増大し，四仏陀の間，進みましたが，私には業の消滅が見られませず，私は，いつも解放されることがありません」

長老は言った。

7　「諸仏が生誕された時，〔般涅槃された時を誰がそなたに告げるのか〕どのようにしてそなたはそれを了知したのか」

餓鬼は答えた。

8　「入胎の時，降誕の時，成道の時，転法輪の時，寿命の般涅槃の時，多くの驚き (vimhaya) があるのでございます」

長老は言った。「驚きとは〔それは何なのか〕」。

9　「虚空に，岩山の頂きに，岩に，大地 (dharaṇī)・平地 (tala) に，水の中にあります蓮華 (paduma) を私は見まして，その時，知るのでございます。

10　その蓮華が〔燃えては萎む時に，それらを見まして〕世尊が入滅されたことを知るのでございます」

長老は言った。

11　「そのように，受けるべき極辺の辛い苦を，激しく多年に亘って経験しているようだが，それはどのような業の果であるのか」

餓鬼は答えた。

12　「昔，カクサンダ (Kakusandha) 仏さまの時代に，その僧団の田のわきで，私は自分の田を耕しておりました。*

13　両方の田の境界には，石柱が立っていました。その柱を引き抜いて，その時，堀り出したままにしていたのです。

14　私は，僧団の田から，土地違反 (aparaddha) をしてしまったのです。その業の報いで，このように報いを受けているのでございます。

(p. 44)　15　そこで死にましてから，私は岩山の頂きに生まれました。生まれた場所から，私は動いておりません。業によるこの報いをご覧下さいまし」

このように言ってから餓鬼は比丘たちに尋ねた。「あなた方はどなたで，具寿さまはどなたのお弟子でいらっしゃいますか」。大長老は言った。

16　「十波羅蜜を成就されて，最上の正覚を得られ，姓がゴータマといわれる仏陀がおられるが，我々はその弟子衆である」

餓鬼は言った。

17　「もし，ゴータマ正覚者さまが，世の導師として現われたお方でありますならば，私は七日後に，無間地獄へ行く者となりましょう。

18　カクサンダ勝者さまと，ゴータマ師さまとの間には，この大地は，四ヨージャナ (yojana) に亘って増大いたしました。

19　年の数は，阿僧祇もの多くが過ぎておりまして，私は餓鬼の世界でその果を多く享受致しておりますが，

20　今や，無間地獄に行きまして，その残余を受けねばなりません。放逸と貪欲とより生じました業は，このように，それは広がったものでございます。

21　それですから，賢者は，放逸と貪欲とを避けるのでございます。不放逸で，又，無貪でありますから，その故に彼らは，楽を得るのです。

22　このように，僧団の所有物を破壊いたしますと，過悪がもたらされるのでありますが，それを保護する人々には，常に，その徳がもたらされるのでございます。

23　このような諸の苦は，業によって生じますが，法を喜ぶ比丘には，生因 (jātihetu) は消失するのです」

石柱餓鬼説話第十三

第十四話　耕田餓鬼説話

次のように伝えられている。

セイロン島 (Tambapaṇṇidīpa) では，多くの比丘が菩提樹を礼拝するために出かけた。マハーコンダから船に乗って，カーヴェーリの港に到着した。そこから，順次，村，町，王都を経て，大きな森に達した。彼らは，(p. 45) 七日間，道に迷い，うろうろしていたが，象の群が通った足跡を見つけ，それに従って進んだ。彼らはそれに沿って行ったところ，ある餓鬼が大きな鋤を牛に結んで耕作しているのを見て，「人間だ」と思い，彼のところに行った。大長老は，近くに立って道を尋ねた。

1　「耕作者よ，皆の者は七昼夜，道に迷っているのだが，もし道をご存知ならば，比丘たちのために教えてくれまいか」

餓鬼は言った。

2　「あなた方は，どなたも，七昼夜道に迷っておいででしょうが，私は，無数年に亘って道に迷っているのでございます」と。

長老は言った。

3　「そなたは，何故，そのように長時に亘って道に迷っているのか。又，友よ，そなたはここで何をしているのか。一体，以前にどのような業を作したというのか」

餓鬼は言った。

4　「迦葉仏さまの時，私はその時はまだ，人間でありましたが，口による悪を作しまして，耕用餓鬼の姿になってしまいしました。

5　私は飲みもせず，食べもいたしません。どこに坐所，臥所がありましょう。昼夜，いつもこの私は，耕し動いてばかりいるものでございます。

6　このように，耕しております私の身体 (kāya) は，夜になりますと燃え，軛・鋤を結んだ牛どもも，鋤・刺棒も燃えるのです。

7　私は，身体を焼かれ，ヤマ界 (yama-loka) に行っておりましたその間に，この大地は，七ガーヴタに亘って増大いたしました。

8　このように，幾年も身・意の苦しみを受けつつ，私は焼かれるのでございます。業の堅固さをご覧下さい」

長老は言った。

9　「そなたは，どれ程辛い業を，どうして口によって作したのか。私はそれを聞きたい。私には宗教心が生まれているのだ」

餓鬼は言った。

(p. 46)　10　「よろしゅうございます。皆さまはお集りになって私の話をお聞き下さい。私が悪業を作しましたその業について説明致しましょう。

11　その昔，カーシ (Kāsi) という名前の都に，そこでは，キキー (Kikī) という王が生類のために，国を治めておりました。

12　その王が築かれた都は，バーラーナシーであります。その都の近くに，迦葉仏 (jina) さまが住んでおられました。

13　安居を過されてから世尊は遊行に出られ，慈悲を垂れて私の村に到着されました。

14　その村では，すべての人々が食物を集め，迦葉善逝仏を弟子とご一緒に招待致しました。

15　ところが，私は，その時，家畜，犁，鋤を集まめして，耕作を理由に，出かけてしまったのです。

16　私を見まして，その場で利欲あり他の利益を求める親族は，私を憐んで次のように言いました。

17　『世の導師である迦葉仏さまがやって来られ，だれもが能力に応じて彼に供養をしているのに，お前はどうして軛の針* (sammā) も施さないのか』

18　その言葉を聞いて，私はカッとして，相手に対して言うべきでない愚かなことを言ってしまいました。

19　『もし，今日，仏さまが私の田を耕やして下さるならば，そのように私も又供養いたしましょう。私は耕作から手を離せないのです*』

20　その言葉を言い終って，そこで死にました私は，この餓鬼の世界に来て，苦受を受けているのでございます。

21　このように辛い，しかも大きな苦を得たのです。口には剣の刃のみがあり，その苦は広大でありました。

22　言葉に慎しみのない私をご覧になって，諸賢は宗教心を起されますように。宗教心を持たれて，生の苦 (bhava-dukkha) より解脱されますように」

このように言って，比丘たちに尋ねた。「あなた方は，具寿さまは，どななたのお弟子でいらっしゃいますか」。長老は言った。

23　「十力 (dasabala) を具され，畏れなく (vesārajja)，自信 (visārada) あり，姓がゴータマといわれる主 (nātha) がおられるが，この者たちは，その弟子衆である」

餓鬼は言った。

(p. 47)　24　「もし，ゴータマ正覚者さまが世の導師として現われたお方でありますならば，私は七日後に無間地獄へ行く者となりましょう。

25　迦葉仏さまと，ゴータマ師さまとの間には，この大地は七ガーヴタに亘って増大いたしました。

26　年の数は，阿僧祇もの多くが過ぎておりまして，私は，餓鬼の世界

に達し，その果を享受致しております。

27　これより，無間地獄へ行きまして，その残余を受けねばなりません。放逸と貪欲とより生じました業は，このように，それは広大なものでございます。

28　このように，すぐれた徳に対して罪を犯しますと，過悪がもたらされるのでありますが，心が浄まるものには，その徳がもたらされるのでございます。

29　一つの言葉の過失によって，かくも恐しい苦を得たのです。法を喜ぶ比丘には，すべての苦滅があるのです」

耕田餓鬼説話第十四

第十五話　米餓鬼説話

次のように伝えられている。

セイロン島 (Tambapaṇṇidīpa) の支提山 (cetiyagiri) に，或る比丘が住んでいた。彼の父が，支提山へ多勢の者と共にやって来た。かの比丘は，父の食事のために米を得ることが出来ず，寺男 (ārāmika) たちの手から，僧団所有の半ナーリー (nāḷī) だけの米を，「明日，お返しいたそう」といって，受取った。ところが彼は，その夜，死んでしまい，支提山の中に餓鬼として生まれたのである。一人の行乞比丘が，夜半，その道を通りかかったところ，かの餓鬼が燃えたままで立っているのを見て，尋ねた。

1　「身体は長く，臭く，火蘊のように燃え，骨と皮だけで覆われているようであるが，そなたは，何故ここに立っているのか」

2　「賢者さま，私は餓鬼でありまして，ヤマ界に苦しむ者でございます。悪業 (pāpakamma) を作して，この餓鬼界にやって来ました」

長老は言った。

(p. 48)　3　「一体，どのような身・口・意による悪事 (dukkata) をなしたのか。どんな業果によって，この餓鬼界に来たのか」

餓鬼は言った。

4　「私は，昔，比丘でありまして，支提山 (cetiyapabbata) に住んでおりました。私は父の食事のために，米を求めました。

5　あちこち求めてみましたが，得ることが出来ず，〔そのため，寺男

の手から僧団の清浄な米を〕半ナーリーを受取りました。

6　明日，一ナーリーに満たして返そう，と決意しました。がその夜，死んでここに来たのでございます」

長老は言った。

7　「その比丘なら知っている。彼は具戒者であり，多聞であった。あのように具戒の彼は，悪道を行かずともよいであろうに」

餓鬼は言った。

8　「そのように，彼は，仏教におきまして，戒を具し，聞をもそなえておりましたが，僧団の所有物を持ち去る罪を犯したことに対して報いがあるのでございます。

9　僧団の財物は，たとえどのように僅かであっても，無視してはなりません。報いの時に，その業が広く報われるのです」

長老は言った。

10　「そなたには，餓鬼の世界から脱するためのいくらかの善行(kusala)がある。私は，仏，法，僧の三に供養 (pūjā) をしてあげよう」

餓鬼は言った。

11　「山から村迄，実に三ガーヴタの間に，車を用意され，間断なく，汚れのない，

12　米を満たされまして，僧団に施して下さいますならば，私は，この餓鬼の胎 (petayoni) から解放されるのでございます。

13　このように，得られた半ナーリーの米は広大のです。もし，これを得させて下さらないならば，私が解放されることは，大変困難です」

(p.49) そこで，長老は，夜が明ける頃，アヌラーダプラへ入り，サッダーティッサ王の前に立った。王は，かの羽毛 (patta) を取って，以前にやって来たことがあるその長老に尋ねた。「尊者よ，そなたは何のために，やって来られたのか」と。長老は，かの出来事を述べ，目的を説明して，「大王よ，米のために」と言った。王は，「いか程であろうか」と尋ねた。長老は，言われた通りのことだけを述べた。そこで，王は三ガーヴタに亘って車を置かせ，米でもって満たし，比丘僧団に施した。終ってから，「餓鬼に，生じよ！」と説戒した。与えられたものだけでかの餓鬼は，餓鬼の状態を捨て，天神の姿 (dibbarūpadhārin) になったのであった。長老は，夜になっ

て，その道を通りかかったところ，天子(devaputta)が長老に礼拝し，前に掌をさしのべて立った。長老は彼を見て尋ねた。

14　「高貴な羽毛をもたれ，すぐれた最上の衣服をつけられ，高貴な輝かしい荘身具で荘厳された肢体をされ，高貴な香りのよき芳香で塗られた肢体をされ，すぐれた財に恵まれておられるが，そなたは三十三天の主(tidasissara)か」

天(deva)は言った。

15　「尊者さま，私は，帰依所の無い時に帰依所へ参りました頼りの無いものでございます。以前，あなたさまは，私に近づかれ，私が限り無い苦しみの海に沈んでおりましたところを，勝れた悲心によって，お結び下され，引き上げて下さいました。

16　利他を作せる者たちがおられます。勝者の衆は，勝者によって導かれますように。*常に……完全円満の心となりますように。又，比丘に，一切の解脱がありますように」と。

米餓鬼説話第十五

(p. 50)　第十六話　食障碍餓鬼説話

次のように伝えられている。

セイロン島(Tambapaṇṇidīpa)のローハナ地方に，パッバタ(山)という名前の僧院(vihāra)があり，そこには大比丘衆が住んでいた。その当時，地方の人々は，自らの手で布施をしたいと思い，僧院へ行って，すべての比丘衆を招請していた。僧団の長老は，「招請された比丘たちはだれも僧院の中では食物を煮てはならぬ」と寺男たちに言い含めた。その僧院へ，食事時にはいつも，ピヤング島(piyaṅgudīpa)に住んでいる二人の比丘がやって来ていたが，その日に彼らは食事が断たれてしまった。僧団の長老は，その場で死んだが，餓鬼の世界に生まれたのであった。或る行乞の比丘が，ボーディピッティ(Bodhipiṭṭhi)地方の閑林(araññа)に，慈住者(mettāvihārin)として住んでいた。かの餓鬼は飢えと渇きに悩まされ，夜半にその長老のもとに近づき，礼拝して〔近くに〕立った。彼を見て長老は尋ねた。

1　「非人にして醜くそなたの身体は恐ろしく，悪臭が漂い，骨ばかり

の集りだが，そなたは何故ここに立っているのか」

餓鬼は言った。

2　「諸の僧院の長老〔僧団長老，指導者〕でありました。あなたさまは，その長老をご存知でございましょう。彼は死んで，ここにやって来たのです」

長老は言った。

3　「その長老なら知っている。彼は具戒者であり，多聞であった。あのように善い者たちは，悪道に再生しないのだが」

ペータは言った。

4　「そのように，彼は仏教におきまして戒を具し，聞をそなえておりましたが，一つの言葉の過失によって，餓鬼の世界へ行ったのでございます」

長老は言った。

(p. 51)　5　「言葉の過失を挙げたが，かのそなたが私に言ったその言葉の過失とやらを話してくれぬか。私はそなたの話を聞きたい」

6　「ボーディピッティ地方にいるすべての地方の人々は，布施をしたいと思い，かのすべての比丘を招請致しました。

7　これを見まして，かの長老は寺男たちにこのように告げたのです。『お前たちは，何であれ，*すべての比丘たちのために，僧院では決して煮てはならぬ』

8　それを聞いて，寺男たちは，その時，その場で煮ることをしませんでした。そのため，かの比丘たちも行所の村へ帰ってしまいました。

9　この僧院へは，いつもピヤング島に住んでいる二人の比丘がやって来ておりましたが，彼らは食事をして帰るのでした。

10　その長老は，考えもなく，その食事を禁止しましたので，かの比丘が又やって来たのですが，その時，食事が断たれてしまったのです。

11　食物を望む比丘たちの食事を妨害しましたため，私は飢えと渇きに焼かれつつ，あらゆるところを徘徊しているのでございます。

12　僧団の利得(lābha)が，どのように少くても或いは多くても，禁止されてはならないのです。僧団にもたらされるものは，無量(ananta)なのですから。

13　私は，よく考えもしないで，暴言を吐いてしまったのです。一つの言葉の過失によりまして，このような苦を得たのです。

14　尊者さま，私をご覧になられて，あなたは，宗教心あるお方として相応しくなられますよう。聞 (suta) と戒を妨害なさいませぬよう，その業が報われてはなりません」

長老は言った。

15　「私は，そなたのために何をいたそうか。どうすれば解放させられようか。私は，仏，法，僧の三に，供養をすることにしよう」

餓鬼は言った。

16　「この地 (pathavī) があまねく山のすべてにまで生長し，諸の車のための道となる時，その時私は解放されるでありましょう。

17　苦を得ました私をご覧になって，お行きになり，比丘がたにお示し下さい。“不放逸に行ぜよ。僧団の所有物を怖畏せよ”」

18　かの餓鬼のことを聞いて，その常乞食者 (piṇḍapātika) は，大寺 (Mahāvihāra) へ行き，ありのままを説明した。

(p.52)　19　それから聞き終って，かの比丘たちは恐怖し，宗教心あるものとなり，僧団の利得を妨害することなく，不放逸に行じたのである。

20　こうした厄難を受けた長老は，ローハナ山でそれを聞き，法喜への畏れが少なからず生じたのであった。

食障碍餓鬼説話第十六

第十七話　旗餓鬼説話

次のように伝えられている。

セイロン島 (Tambapaṇṇidīpa) のローハナ地方に，長寿大塔 (Dīghāvumahāthūpa) があった。その旗(patākā)が，風で引き抜かれて，地主(Kuṭumbiya)の穀物村 (Sassagāma) の畑に落ちたのである。畑の囲りをうろうろしていた地主 (khettasāmika) は，それを見つけて，取りあげ，文字 (akkhara) を見て捨ててはおかなかった。貪欲な心により，それを隠し持ち去った。彼は，しばらくしてから死んでしまったが，千重の鉄布で覆われた餓鬼となって生まれた。燃えている身体で，徘徊しながらボーディピッティ地方へ行き，或る常乞食者に〔近くへ行って礼拝〕* 合掌をして離れて立った。彼

を見て長老は尋ねた。

1　「全身が隠され，金属布 (lohapaṭṭa) によって覆われ，火の色 (aggivaṇṇa) を帯びたそなたは，何故ここに立っているのか」

餓鬼は言った。

2　「尊者さま，私は鉄布で覆われました餓鬼でございます。いつも，一千枚の布を焼かれては被われるのです」

長老は言った。

3　「一体，どのような身・口・意による悪事をなしたのか。どんな業果によって，鉄布により焼かれているのか」

餓鬼は言った。

(p. 53)　4　「〔私が人間でありました時〕裕福な地主であり，私は，多くを作りまして，諸の畑を見ては，歩き廻っていたのでございます。

5　長寿大塔より，山腹へ運ばれた旗が風で一ガーヴタ行って〔私の畑に止まりました〕。

6　そこに止ったのを見まして，手でそれを取ったのです。欲しいと思いつつ，そこに書かれている文字を見ました。

7　諸の文字を見まして，その時私は貪欲な心が出て，取ってその場でその仏塔の旗 (dhaja) を隠しました。

8　それから死にまして，私は餓鬼の世界に落ち，私には千の鉄布の衣服が課せられたのでございます。

9　鉄で飾られましたその布が，私の身体を焼くのです。私には，どのような安らぎもありません。〔苦しみが生じること強く，

10　坐所，臥所も〕ありません。私には，どこに飲食物があるというのでしょう。無限の苦を得たのです。私には死がありません」

長老は言った。

11　「私は，そなたのためにどのようなことをいたそうか。どうすれば解放させられようか。そなたのために，私は，仏，法，僧に，旗を献げてあげよう」

12　「もし，衣服一千枚の旗が，ここに持ち運ばれて〔長寿塔に供養されますならば，そのように解放がありましょう」

13　こう言って，かの餓鬼はその場で消えうせてしまった。そこで長老

は，夜が明ける頃，急いで又，

14　旗をあちこちに求めて，五十ばかりを得た。長老は長寿塔に供養して，餓鬼のために説戒した。〕

「彼に生じよ！」といって，得られた分を与えた。それより又，夜に，長老のところへやって来て，このように言った。「尊者さま，私の頭(matthaka)は，八指だけ開かれました。これをご覧下さいまし」と。翌日，長老は，探し求めて五十ばかりを得たので，同様に用意して，得られた分を施したところ，彼には再び八指の長さが開かれた。その順序で，一千を(p.54)満たした時，全身は黄金の色になった。翌日，彼は全体を荘厳し，夜半時にやって来て，長老の足を礼拝し，三度右繞して合掌し，近くに立った。彼を見て長老は尋ねた。

15　「容色麗しく，諸の飾りによって荘厳され，清浄な衣服をつけられ，よい香りがあり，財主のようであるが，そなたは一体どなたか」

天子(devaputta)は言った。

16　「以前は，恐ろしい姿をし，赤熱の布で覆われておりましたが，あなた様は，そのように疲れ悪臭のある私を，餓鬼の状態から引き上げて下さいました。大雄(mahāvīra)さま，最上の安楽にお立ちになりますように。

17　放逸の泥土に沈み，私は餓鬼道(petagati)に落ちました。塔の旗を取り，私は赤熱の布を持つものとなったのです。法を喜ばれる方よ，安楽のためにその旗をお避け下さい。

18　このように，仏に，法に，又，最上の衆であります僧に，少しでも異変がありますならば，限り無く辛い果があるのです。

19　同様に維持(adhikāra)がたとえ僅かでありましても，広大な果があり天，人の成就に到達するのです。

20　それ故に，三法(ti-vatthu)に対して，罪を犯すべきではありません。成功の果を願って，維持こそ作さるべきであります。

21　そこで死にまして，多くの天，人は，天，人の成就を得て涅槃に達したのでございます」

こう言い終って，その天子は，長老の足に礼拝し，右繞をなしてから，そ

の場で消え去ったのであった。

旗餓鬼説話第十七

(p. 55) 第十八話　軛牛餓鬼説話

次のように伝えられている。

セイロン島 (Tambapaṇṇidīpa) のラマニーヤ (Ramanīya) 地方にあるヴァーンマナッディ (Vāmmanaddi) 村の，河のほとりに僧院があった。その僧院にいる或る常乞食の阿羅漢であり漏尽である比丘が，托鉢のため，村に入った。しなければならない重要な用件のため，進み下っていたが，或る群の中に立っている軛牛 (balivadda) を見て，近づいて尋ねた。

1　「群の中に入って，長時間立っているし，四足は動かず，軛牛のように見うけられるが」

餓鬼は言った。

2　「尊者さま，私はヤマ界に住む貧しい餓鬼でございます。軛牛となりまして長らくここに立っているのです」

長老は言った。

3　「そなたは軛牛となって長い間立っているが，以前に，どのような悪因となるようなことを作したのか。」

餓鬼は言った。

4　「私は，過去世にはここの村人でありまして，アヌラーダプラで，かつて私は刀剣作り*をいたしておりました。

5　その時は，迦葉仏さまが，世の導師として現われておりまして，その仏さまの正法は，セイロンの島 (dīpalañjaka) に輝いてございました。

6　勝者の弟子がたは，その島の近くに住んでおりました。彼らは自分たちの食事のために小屋 (sālā) を作りました。

7　私はその小屋を荒しまして，穀物の種を投げすてました。その種は，すべて七日間で芽を出したのです。

8　そこで〔比丘たちは種を見たため，中に入りませんでした。七日間を経ました後〕私の諸の畑に植えつけられたのです。

9　当時，私は村のうそつき (gāmakūṭa) であり，比丘に反感をかう者

でありまして，彼らの安楽な坐堂（āsanasālā）を妨害しては，わめきたてました，

(p. 56)　10　この業を作しまして〔そこで死んで私は軛牛と〕となり，私は餓鬼の苦を受けているのでございます。

11　このような持戒の人々を悩ませてからというものは，私には，昼夜を問わず，どのような安楽もありません。

12　迦葉仏さまと，ゴータマ師さまとの間には，そこでは，この大地は七ガーヴタに亘って増大いたしました。

13　年の数は，阿僧祇もの多くが過ぎておりまして，餓鬼の世界へ行っております私には，立った身体のままで報を受けております。

14　飲むことも食べることも致しませんし安坐(nisajjā)も経行(caṅkama)もありません。手足は動きもせず，私は立ったままでおりますが，

15　今や無間地獄へ行きまして，その残余を受けねばなりません。放逸と貪欲とにより生じました業は，このように，それは広がったものでございます。

16　このように，すぐれた徳に対して罪を犯しますと過悪がもたらされ，諸の有徳者に対して相応しく致しますと，彼には徳がもたらされるのです。

17　尊師さま，あなたさまは，家畜となって苦に悩害された私をご覧になって，善い人々に，障碍（bādhana）に対する果をお告げ下さい。

18　仮屋（maṇḍapa）でも，樹下でも，或いは会堂（sālā）でも，寝室でも，善き人々の住居のために，そこで悩害すべきではありません。

19　善き人々を悩害いたしますと，彼は餓鬼道に落ちて，ちょうど私がここで受けているように実に辛い苦を受けるのです。

20　僧団の安穏を計り，善道において楽を得つつ，法を喜ぶ比丘にはすべての苦滅があるのです」*

このように，かの餓鬼は，自己の業を長老に告白して，七日間，餓鬼の状態にとどまり，そこで死んで無間地獄(avīci-niraya)に入っていった。

軛牛餓鬼説話第十八